

大学生のお金に対する禁忌感の意識調査： 金融リテラシー・家庭環境との関係*

山 根 智沙子

広島経済大学経済学部経済学科

阿 萬 弘 行

関西学院大学商学部

本 西 泰 三

関西大学経済学部経済学科

要 旨：

本稿は大学生を対象にアンケート調査を行ない、お金に対する意識を定量化し、その特徴および金融リテラシーに与える効果を実証的に明らかにした。その結果、お金に対する禁忌感が強い学生は、相対的に金融リテラシーが低い傾向が発見された。また、両親の学歴が高い場合に、学生のお金に対する心理的忌避傾向が弱まること、祖父母の金融知識が高い場合に、学生の金融リテラシーが高まることを確認した。さらに、幼少期のお金の管理法も、一部にお金に対する意識に違いをもたらしていた。最後に、因子分析を行ない、お金に対する意識に4つの共通因子を抽出し、先行研究とは異なる日本独自の傾向をもつことを示唆する結果を得た。

キーワード：

お金の禁忌感、お金の倫理尺度（MES）、金融リテラシー、家庭環境

目 次：

1. はじめに
2. アンケート調査：お金に対する意識の定量化
3. 実証分析結果：金融リテラシー・禁忌感・家庭環境
4. おわりに

1. はじめに

近年、金融のグローバル化や金融商品の多様

化など、金融サービスの高度化も相まって、金融リテラシーの重要性はますます高まっている。国内外のファイナンス研究の多くは、金融リテラシーが高まれば、株式市場への参加や退

* 本研究に対し、西尾圭一郎氏および本誌匿名レフリー2名から有益な助言をいただいた。記して感謝申し上げたい。また、本研究は、公益財団法人石井記念証券研究振興財団、公益財団法人全国銀行学術研究振興財団、JSPS 科研費（18K01716、20H01499）より助成を受けている。

職後の準備などの金融行動に好ましい影響を与えること発見している。つまり、金融リテラシーを原因変数として、金融行動の成果変数への関係を見出している (Van Rooij et al. [2011])。そうした金融リテラシー・金融行動について考えるとき、その個人がそもそも「お金 (金銭)」についてどのような意識・態度をもっているかは重要な視点である。なぜなら、通常、金融リテラシーは、資産運用の収益性・リスクを改善するための道具という性格上、お金と強く関連した知識・能力だからである。したがって、その向上への人的資本投資には、自分の資産の金銭的価値を高めたいというお金のポジティブな意識が働く。しかしながら、お金の禁忌感というネガティブな意識が強い場合、金銭利益を目的とする金融リテラシー向上への人的投資は抑制される可能性がある。例えば、「お金儲けに囚われたくない」「お金のことは話題にしたくない」などの意識によって、自分自身の金融リテラシー獲得に消極的になること、家庭内において金融教育が乏しくなること、あるいは、形式的に同じレベルの金融教育を受けたとしても実質的な金融リテラシー向上への意欲が抑制されること、などが挙げられる。このことを踏まえて、本稿は、大学生を対象にアンケート調査を実施し、お金に対してどのような意識をもっているのかを定量化するとともに、それらが金融リテラシーに与える影響を検証する¹⁾。

金融リテラシーの決定要因に関する先行研究では、Bianchi [2018] はフランスのサーベイデータを用いて、高い教育水準・資産・男性であることなどが高い金融知識につながるとしている。Kawamura et al. [2021] は日本のウェブ調査の結果を用いて、金融リテラシーに正の影響を与える要因として、大学の金融教育・学歴・金融経験・計算能力・金融知識の自信不足・低い割引率・リスク回避・逆S字状の確率ウェイト・曖昧性回避・高齢・男性を挙げている。Jappelli and Padula [2013] は、金融知識を人的資本の蓄積ととらえ、初期の知識がその後の金融知識の蓄積に影響することや、金融知識の量と資産がライフサイクルの中で正の相

関を持つことを示した。Lusardi et al. [2017] は、確率的ライフサイクルモデルを用いて、金融知識の蓄積が内生的に決まるモデルを採用し、金融知識の量が学歴や年齢などによって変わることを説明した。日本での研究では、小山内・西尾・北野 [2016] は、大学生の金融リテラシーは、理系のほうが文系よりも高いことを示し、同時に、日米比較を行なっている。島 [2017] は、大学生へのアンケート調査から、投資ゲームへの関心や将来の不安感が金融リテラシーと正の相関をもつことを示している。

本稿では、これらに加えて、新たな要因として、個人のお金に対する意識を分析対象とする。「人々がお金に対してどのような意識や感情をもち、それによりどう行動するか」といったお金に対する意識・態度を定量化する研究は、心理学の分野において盛んに行なわれている。伝統的な心理学研究の世界では、お金そのものに関する感情や行動などの観点から、お金に対する意識や態度を測る尺度を構築している²⁾。代表的な尺度としては、Yamauchi and Templer [1982] のMAS (Money Attitudes Scale) や、Furnham [1984] のMBBS (Money Beliefs and Behavior Scale)、Tang [1992] のMES (Money Ethic Scale) の3つに集約される³⁾。Keller and Siegrist [2006] は、このTangのMESを拡張した指標を用いて、お金に対するネガティブな倫理観をもつ人は、株式市場への参加意思が弱いことを示している⁴⁾。すなわち、人間は経済合理性という観点からのみで投資行動をしていないことを裏付けている。実際、金銭的価値が経済活動へ動機付けとしてポジティブに機能することは経済学での基本的な考え方であるが、金銭的報酬の付与が、かえって自主性・規範意識を損ねることで、望ましい経済行動へのインセンティブを損ねることを示した論文もある (Frey and Jegen [2001])。日本において、直感的ではあるが、お金に対して独自の社会的規範 (風習や慣例) が共有されているように思われる。身近な生活の例では、他人とお金のことを話題にすることを嫌う、友人同士のお金の貸し借りを避ける、香典やお年玉は現金で渡す

が、お礼として現金を渡すことは控える（商品券なら良い）などである。そこで、本稿では、純粹に経済合理性だけでなく、さまざまな取引に対して金銭対価を用いることへの禁忌感（忌避感）を測る。具体的には、既存研究の倫理尺度 MES だけではなく、独自の質問を実施し、「金銭の関わる取引を避けるべき」という意識（経済取引モラル）について定量化する⁵⁾。

さらに、これらの禁忌感や金融知識が、養育期の家庭環境によって差異があるか否かを検証する。家庭環境には、家族構成や両親の学歴、所得、就労状況、経済的・社会的地位などさまざまなものが含まれるが、経済学においては、とりわけ親の所得に注目し、親の貧富が子へと世代間で引き継がれる可能性に関心が寄せられてきた (Solon [1992], Zimmerman [1992])。言い換えると、家庭における教育投資の差が子どもの成果変数に大きな影響を与え、格差・不平等をもたらすことが明らかにされつつある (Cunha and Heckman [2007])。なかでも、職業訓練や高等教育における人的資本形成に関心が注がれてきたが、近年では、養育期の家庭環境が金融知識の水準に影響することも明らかになっている (Shim et al. [2010])。また、Sabri et al. [2010] は、マレーシアの大学生を対象に、家族での金融に関する話し合いが金融リテラシーに有意な影響を及ぼすことを示している。日本においても、北野ほか [2016] は家族と金融や投資の話をするという要素が金融知識にプラスの影響を与えるという結果を得ている。そこで、本稿でも、家庭における養育期の金銭教育（お小遣いのあげ方等）が、金融知識へ与える影響について検証する。

お金に関する意識・態度についても、性別、文化、教育、政治的・宗教的価値観、信念などにより異なることが知られている (Gresham and Fontenot [1989], Tang [1992], Lim and Teo [1997], Furnham et al. [2012])。例えば、Furnham [1984] は、アメリカのさまざまな大学生を対象に分析を行ない、年齢、教育、プロテスタントの労働倫理の信念によってお金に対する態度が異なることを示した。Tang

[1993] は、中国とアメリカを対象にそれぞれ分析を行ない、お金に対する意識に共通点と相違点があることを見出した。すなわち、同じ尺度を用いてお金に対する意識を測定したとしても、国や文化が異なる地域を対象にする場合は、文化的背景を十分に考慮する必要がある。そこで、本稿では、先行研究との比較をするとともに、家庭環境が禁忌感に及ぼす影響について考察する。とりわけ、本稿の分析は大学生が対象であり、生まれ育った地域や家庭環境の影響が強く残っていると考えられる。

このような問題意識から、本稿は3つの特徴を持っている。第1の特徴は、アンケート調査により、お金に対する禁忌感や本稿独自の概念である経済取引モラルを定量化する点にある。第2の特徴は、金融リテラシーの決定要因として新たにお金に対する禁忌感やモラルという倫理的側面を加える点にある。そして、これらの禁忌感やモラル、金融リテラシーがどのように形成されてきたか（家庭環境）を探る点が第3の特徴である。

本稿の残りの部分は次のように構成される。次節では、お金に対する意識の定量化について詳しく説明するとともに、アンケート調査の概要と分析に用いる変数について述べる。3節では、お金に対する意識の特徴を明らかにし（学生の属性の差異、多重比較、因子分析）、それらが金融リテラシーに影響を及ぼしているか否かを考察する。4節は結論を要約する。

- 1) 本稿での「お金」とは、単に、現金収入・現金資産自体だけでなく、預金・証券・不動産などの金融資産、および、金銭を伴う経済取引を含むものとして定義している。
- 2) 既存の「お金に対する態度」の尺度については、渡辺・佐藤 [2010] や Furnham [2014], Lay and Furnham [2018] を参照されたい。それぞれ作成された年代に沿って各尺度の特徴をまとめている。
- 3) Yamauchi and Templer [1982] の MAS (Money Attitudes Scale) は、5つの要因（権力・名声、保持時間、不信、不安、品質）から構成されている。Furnham [1984] の MBBS (Money Beliefs and Behavior Scale) は MAS を参考に、6つの要因（強迫観念、権力／支出、保持、安心／保守的、不足、努力／能力）を特定している。Tang [1992] の MES (Money Ethic Scale) は、感情的要素（善と悪）と認知的要素（達成、権力、

自由), 行動的要素(節約)から構成されている。後に, より実用的にするため, MESの短縮版も作成している(Tang [1995])。

- 4) Guiso et al. [2008]は, 信頼感の高い人は株式市場に参加する傾向を発見している。
- 5) 海外においてはお金に対する態度や意識に関する研究は数多く存在するが, 渡辺・佐藤[2010]でも述べられているとおり, 日本を対象にした分析は数少なく, 海外での心理尺度を日本に適用する際には十分な注意が必要である。その点を考慮し, 本稿では, よりシンプルな尺度であるTang [1995]を参考に, お金に対する禁忌感の定量化を試みる。

2. アンケート調査：お金に対する意識の定量化

本稿は, 西日本に位置する3大学の経済・商学系学部生を対象に, お金に対する意識や金融知識, 家庭環境についてWeb調査「大学生教室アンケート」を独自に実施した。有効回答数は107名(男子76名, 女子31名, 平均年齢: 20.5歳, $SD=1.11$)である⁶⁾。

(1) 大学生のお金に対する意識

(a) お金の倫理尺度: MES (Money Ethic Scale)

本アンケート調査は, Tang [1995]のMES (Money Ethic Scale)を参考に, 6尺度全12項目を尋ねている。具体的には, お金に対する意識を「A. 善」, 「B. 悪」, 「C. 達成」, 「D. 尊敬」, 「E. 節約」, 「F. 自由と権力」の6尺度から測り, 各問に対して「そう思わない」から「そう思う」の5段階で回答を求めている⁷⁾。本稿では, お金への禁忌感という観点から, 「B. 悪」の高い得点はお金への強い禁忌感を示すと定義する。反対に, その他の項目「A. 善」, 「C. 達成」, 「D. 尊敬」, 「E. 節約」, 「F. 自由と権力」では, スコアが高い場合, お金へのポジティブな態度を示しており, 禁忌感が弱いと解釈する。表1の上段に質問内容と記述統計量を示している。

表1 お金に対する意識を測る変数の記述統計量

アンケート 質問項目					
お金の倫理尺度 MES			標本数	平均	標準偏差
A. 善	1 A	お金はわたしたちの生活においてかけがえのないものだ	107	4.64	0.72
B. 悪	2 B	すべての悪の根源はお金だ	107	2.68	1.09
	3 B	お金は恥ずべきものだ	107	1.80	0.91
C. 達成	4 C	生きる最大の目的はお金だ	107	2.96	1.20
	5 C	お金はあればあるだけよい	107	4.37	0.89
D. 尊敬	6 D	お金は人を呼ぶ	107	3.69	1.14
	7 D	お金があると人から尊敬される	107	3.04	1.24
E. 節約	8 E	ときは金なり	107	4.15	0.95
	9 E	お金のために働く	107	3.97	0.96
F. 自由 と権力	10 F	お金は自立と自由を与えてくれる	107	4.09	0.90
	11 F	お金は権力をあらわす	107	3.74	1.18
	12 F	結局は、お金がものをいう	107	3.82	1.07
経済取引モラル					
1. (娯楽消費) テーマパークのファストパス代を支払う			107	0.80	0.40
2. (医療) 治療費とは別に医者へ謝礼を支払う			107	0.34	0.47
3. (教育) 成績が上がったことへの報奨金を受け取る			107	0.67	0.47
4. (公共マナー) 落とし物を届けたことへの謝礼を受け取る			107	0.67	0.47

注) MESは, 各問に対して「そう思わない」=1から「そう思う」=5の5段階で測定した変数, 経済取引モラルは, 各取引について, 「良い」=1, 「悪い」=0をとる変数である。

(b) 経済取引モラル

金銭を伴う経済取引への禁忌感（経済取引モラル）を測るため、Sandel〔2012〕にヒントを得て、本稿では独自に、異なる市場性・公共性の領域から、娯楽消費・医療・教育・公共マナーに関連した領域の取引を具体的に想定した⁸⁾。これらのお金を支払う行動と受け取る行動に対し、「良い」と思うか、「悪い」と思うかの2つの選択肢で尋ねており、本稿では、「悪い」と回答した場合を経済取引モラルが高く、お金への禁忌感が強いと定義する。具体的な質問内容と記述統計量を表1の下段に示している。

興味深いことに、対象とする取引の領域によって、お金への禁忌感は大きく異なることが

分かる。平均値を見ると、最も禁忌感が高い金銭取引は、医療に関する質問であり、逆に、最も禁忌感が弱く受け入れやすい金銭取引は、娯楽消費に関する質問である。医療という生命倫理に近い領域では、お金を介在させることへの強い抵抗感があり、娯楽消費という規範意識が求められない領域ではお金への抵抗感は弱い。

教育と公共マナーの質問はその中間となっている。この経済取引モラルにおいて、平均値の差の検定を行なったが、男女の差は見られなかった。しかし、公共マナーについては、近畿地方出身の方が他地域出身者より禁忌感が弱いことが確認された。

(2) 大学生の金融知識の実態

次に、金融知識について見てみよう。本稿で

表2 大学生の金融知識の実態

パネルA 金融知識の平均正答率（問題数5問）

	標本数	正答率 (%)	標準偏差
合 計	107	71.21	1.45
男	76	70.79	1.45
女	31	72.26	1.50
大学1年生	15	42.67	1.73
大学2年生	25	68.80	1.45
大学3年生	50	77.60	1.25
大学4年生	16	81.25	0.10

注) パネルAには、金融知識に関する5つの問いの平均正答率を表している。

パネルB 金融知識に関する正誤問題の内訳

	質問内容	正答率
分散投資	資産を一つの企業にまとめて投資するより、複数の企業に分散して投資したほうが安全な収益が得られる。この文章は正しいですか、間違っていますか。 1. 正しい 2. 間違っている 3. わからない	85.85%
預金金利	あなたは10,000円の普通預金があり、利率は年2%です。預金をそのままにしておくと、5年後の残高はいくらになりますか。 1. 10,200円より多い 2. ちょうど10,200円 3. 10,200円未満 4. わからない	76.64%
インフレ率	あなたの普通預金口座の金利が年1%で、インフレ率（物価上昇率）が年2%であるとし、1年後に、あなたはこの口座のお金でどれだけのものを買うことができますか。 1. 現在より多い 2. 現在と同じ 3. 現在より少ない 4. わからない	67.29%
住宅ローン	住宅借入において、15年ローンは30年ローンに比べると月々の支払いは多いが、返済期間中の総金利支払い額は少ない。この文章は正しいですか、間違っていますか。 1. 正しい 2. 間違っている 3. わからない	67.29%
外国為替	為替レートが円高になると、外国通貨建てで保有する金融資産の円建ての価値はどうなるでしょう。 1. 価値は上がる 2. 価値は変わらない 3. 価値は下がる 4. わからない	61.54%

注) パネルBには、質問ごとに正答率を求め、正答率の高い順に示している。また、正答を太字にしている。

は、金融関係の講義を履修しているか否かによって大きな差が出ないように、多くの金融リテラシー研究で用いられる基本的な問題を質問している (Lusardi and Mitchel [2008], [2014])⁹⁾。具体的な出題分野は、分散投資、預金金利、インフレ率、住宅ローン、外国為替の5つである¹⁰⁾。表2のパネルAに5問全体の平均正答率を、パネルBに具体的な質問内容と各正答率を示している。パネルAを見ると、107名の全5問の平均正答率は71.2% (平均正答数は3.56) である。学年ごとに正答率が上がっていること、女子学生の正答率が男子学生より若干高いことがわかる¹¹⁾。

パネルBを見ると、分散投資に関する質問の正答率が一番高く85.9%であり、最も正解率が低い問題は外国為替に関するもので61.5%であった。これらの結果は、金融広報中央委員会が実施している「金融リテラシー調査」(2019)での全回答者および学生の全体的な正答率よりも高い¹²⁾。例えば、同調査の分散投資問題の正答率は、全国回答者で47.3%、学生で31.6%である。これらのギャップは、本稿での対象が経済・商学系の学生であることに起因すると思われる。本稿では、金融知識5問全体の正答数を金融リテラシーとして採用する。すなわち、正答数が多いほど金融リテラシーが高いことを意味する。

(3) 養育期の家庭環境

家庭環境を表わす代理変数として、まず、両親の学歴、両親・祖父母の金融知識の有無を採用する。これは、親の金融知識が高ければ、子の金融知識も高くなるといったように、世代間で受け継がれる可能性を検証するためである。両親、祖父母の金融知識を測る設問としては、正誤問題ではなく、大卒 (経済・経営系学部) か否か、金融にかかわる職業経験の有無、投資経験の有無など幅広く捉えている。その他に、お金に対する意識や金融知識に影響を与えるものとして、子どもの頃のお金の管理法 (お小遣いのもらい方・お年玉の使い方) を採用する。これは、家庭における金銭教育の実践方法の違

いを反映させるものである。すなわち、是非善悪を判断するのではなく、養育期の金銭教育によってその後のお金に対する意識や金融知識に差異がみられるか否かを確認することを目的とする。

- 6) 本稿が調査した大学 (広島経済大学、関西学院大学、関西大学) は西日本に位置しているため、近畿、中国地方出身者が約8割を占めている。
- 7) 6つの尺度の分け方は渡辺・佐藤 [2010] を参考にしている。
- 8) Sandel [2012] では、さまざまなエピソードを紹介することによって、倫理観と市場取引で供給される財・サービスの境界を提示している。
- 9) 本稿が採用した金融リテラシーを測る尺度は、現実の金融上の適切な判断を行なう際に必要な知識と比較すると、格段にやさしい質問というデメリットがある。他方で、Campbell [2016] も指摘しているとおり、これらの質問は簡潔でわかりやすく、一般的なアンケート調査においては用いやすいというメリットもある。また、これまでに国際的に広く用いられている尺度であるため、先行研究との比較も可能となる。ただし、国際的な尺度を日本に適用することに関しては、注意が必要である。家森ほか [2020] は、Lusardi and Mitchell [2008] の3つの質問 (3大質問：金利計算、インフレ、リスク分散投資) が、日本の家計の金融リテラシーを測る場合においても適切かどうかを検証しており、生活設計においては重要な質問であるが、金融行動を生起する質問としては内容や難易度について検討が必要であると結論付けている。以上より、本稿では、分析対象を大学生としている点も考慮し、Lusardi and Mitchell [2008] 等が考案している標準的な5つの質問を採用することとした。
- 10) 小山内ほか [2016] も、大学生を対象として金融リテラシーを計測しているが、本稿とは異なり、より詳細な設問を実施している。
- 11) 男女間の平均正答数の差についてt検定を行なったが、有意な結果は認められなかった。この結果は、島 [2017] と整合的であり、経済・商学部系の大学生を対象にしていることが理由の一つと考えられる。
- 12) 金融リテラシー調査 [2019] (shirupuruto.jp) を参照。

3. 実証分析結果：金融リテラシー・禁忌感・家庭環境

(1) お金に対する禁忌感：MESと経済取引モラルの相関

お金に対する禁忌感と経済取引モラルの相関係数を表3に示す。もし両変数が倫理観に共通性をもっていれば正の相関を、そうでなければ負の相関を示すと予想される。ただし、悪に関

表3 お金に対する禁忌感：MES と経済取引モラルの相関係数

アンケート 質問項目	経済取引モラル			
	1. ファストパス代	2. 医者への謝礼	3. 成績への報奨金	4. 落とし物への謝礼
お金の倫理尺度 MES				
1 A かけがえのないもの	0.08	0.02	0.10	0.04
2 B すべての悪の根源	0.12	-0.12	-0.17*	-0.17*
3 B 恥ずべきもの	-0.11	-0.11	-0.11	-0.17*
4 C 生きる最大の目的	-0.13	-0.14	-0.16	-0.12
5 C あればただよよい	0.08	0.01	-0.11	-0.09
6 D 人と呼ぶ	0.01	0.12	-0.01	0.09
7 D 人から尊敬される	-0.25***	0.04	-0.11	0.04
8 E ときは金なり	-0.20**	0.12	0.26***	0.22**
9 E お金のために働く	-0.09	-0.12	0.06	0.11
10 F 自立と自由を与えてくれる	-0.19*	-0.03	-0.02	0.12
11 F 権力をあらわす	-0.17*	0.06	-0.07	0.05
12 F お金がものをいう	-0.21***	-0.09	0.05	0.05

注) MES は、各問に対して「そう思わない」= 1 から「そう思う」= 5 の5段階で測定した変数、経済取引モラルは、各取引について、「良い」= 1、「悪い」= 0をとる変数である。*** は1%水準、** は5%水準、* は10%水準を表す。

する変数（2B と3B）では、予想符号は逆になる。

表3を見ると、「1. ファストパス代」と「自由と権力」に分類される3つの設問（10F～12F）は、すべて10%水準以下で有意に負である。すなわち、お金には自由や権力があると思っている学生ほど、ファストパス販売を受け入れないことがわかる。同様に、「7D. 人から尊敬される」と「8E. ときは金なり」も5%水準以下で有意に負である。つまり、娯楽消費に対する金銭取引への禁忌感とMESは同じ方向では変動しない。2つの指標は異なるお金への意識を捉えている可能性がある。

「2. 医者へ謝礼」は、いずれの変数も有意ではなかった。そのため、この取引タイプでは、MESとの相関は不明確である。次に、「3. 成績への報奨金」については、「2B. すべての悪の根源」と10%水準であるが有意に負である。すなわち、お金は悪だと思っている学生ほど、報奨金を受け入れない。逆に、「8E. ときは金なり」は、1%水準で有意に正である。「ときは金なり」は機会費用を指すものであり、成績が上がったことへの対価として、報奨金を受け取るという費用と対価の関係を「良い」と感じている表れだと考えられる。つまり、この教育に関する取引への意識は、

MESと同じ方向に働いている。「4. 落とし物」に関して、「悪」に分類される2Bと3Bの両方において、10%水準ではあるが有意に負である。すなわち、お金を悪として捉えているほど、落とし物の謝礼を受け取ることを許容しない。「8E. ときは金なり」は5%水準で有意に正である。つまり、公共マナーの取引への意識は、MESと一致する傾向がある。

経済取引モラルとMESの相関傾向をまとめると、「3. 報奨金（教育）」「4. 落とし物（公共マナー）」では、予想と一致する相関をもつこともあれば、「1. ファストパス代（娯楽消費）」のように、そうではない逆の動きをすることもある。お金への禁忌感、その逆の好意意識を計測することに関しては、MESと経済取引モラルは、想定する取引によって異なる側面を反映していると言える。実際に、この後の分析結果では、「1. ファストパス代」が、その他の取引とは異なる傾向を示すこともあるため留意したい。

（2）金融リテラシーとお金の禁忌感

お金に対する意識と金融リテラシーの相関関係を表4に示す。全体的な傾向としては、MESと経済取引モラルの両方で、お金への禁忌感が強い人は、金融リテラシーが低くなって

表4 お金に対する意識（MES・経済取引モラル）と金融リテラシーの相関係数

お金の倫理尺度 MES	金融リテラシー項目					
	金融 リテラシー	分散 投資	預金 金利	インフレ 率	住宅 ローン	外国 為替
1 A かけがえのないもの	0.08	0.06	0.16	0.13	0.10	-0.15
2 B すべての悪の根源	-0.28***	-0.27***	-0.12	-0.39***	-0.15	0.03
3 B 恥ずべきもの	-0.33***	-0.18*	-0.27***	-0.35***	-0.15	-0.10
4 C 生きる最大の目的	-0.15	-0.15	0.00	-0.17*	-0.12	-0.05
5 C あればただよよい	0.14	0.12	0.11	0.18*	0.12	-0.10
6 D 人を呼ぶ	0.07	0.11	0.12	0.02	0.07	-0.08
7 D 人から尊敬される	0.08	0.14	0.02	-0.01	0.05	0.10
8 E ときは金なり	0.18*	0.38***	0.13	0.17*	0.09	-0.15
9 E お金のために働く	0.11	0.22**	0.10	0.06	0.11	-0.12
10 F 自立と自由を与えてくれる	0.09	0.08	0.16	0.10	0.07	-0.11
11 F 権力をあらわす	0.05	0.17*	0.01	0.07	-0.04	0.00
12 F お金がものをいう	0.23**	0.14	0.24***	0.22***	0.05	0.10
経済取引モラル	金融リテラシー項目					
	金融 リテラシー	分散 投資	預金 金利	インフレ 率	住宅 ローン	外国 為替
1. ファストパス代	-0.12	-0.20***	-0.05	-0.14	0.11	-0.10
2. 医者への謝礼	0.05	0.01	0.07	-0.01	0.16	-0.09
3. 成績への報奨金	0.16*	0.13	0.23**	0.11	0.02	0.01
4. 落とし物への謝礼	0.26***	0.13	0.23**	0.28***	0.11	0.06

注) MES は、各問に対して「そう思わない」= 1 から「そう思う」= 5 の5段階で測定した変数。経済取引モラルは、各取引について、「良い」= 1, 「悪い」= 0 をとる変数である。*** は 1% 水準, ** は 5% 水準, * は 10% 水準を表す。

おり、これは、当初の予想と一致する結果である。具体的には、上段の MES のうち、禁忌感を最も代表的に象徴する「悪」に分類される 2 つの質問項目「2 B. すべての悪の根源」、「3 B. 恥ずべきもの」と金融リテラシーは、1% 水準で有意に負である。特に、分散投資・預金金利・インフレ率の知識と有意に負の相関がある。「節約」に分類される「8 E. ときは金なり」と「自由と権力」に分類される「12 F. お金がものをいう」は、10% 水準以下で有意に正の相関を示し、お金への禁忌感が弱い（つまり好意度が高い）学生の金融リテラシーは高い傾向にある。下段の経済取引モラルでは、「3. 成績への報奨金」「4. 落とし物への謝礼」の取引を許容する学生もまた、金融リテラシーは高い。

(3) 養育期の家庭環境

(a) 両親の学歴や金融知識の有無

金融リテラシー、お金に関する変数と両親の学歴・金融知識の相関係数を表5に示す。

最上段を見ると、金融リテラシーと両親の学歴はいずれも正の符号をもつが有意ではなく、両親の金融知識も有意ではない。これに対し、祖父母の金融知識は 1% 水準で有意に正である。表には記していないが、とりわけ祖父母に投資経験があると孫である学生の金融リテラシーが高いことも確認している。

次に、中段の MES との相関をみると、全体的に、親の学歴・金融知識が高いほど、お金の禁忌感は弱い。とくに、母親の影響が明らかに大きい。「悪」以外の変数と母親の学歴は有意に正の関係にある。すなわち、母親の学歴が高いほど、子である学生はお金に対するポジティブな意識を抱いていることがわかる。父親の学

表5 家庭環境を表わす変数との相関係数

アンケート 質問項目	両親の学歴		家族の金融知識	
	父親	母親	両親	祖父母
金融リテラシー得点	0.16	0.13	-0.15	0.26***
お金の倫理尺度 MES				
1 A かけがえのないもの	0.30***	0.42***	0.06	-0.02
2 B すべての悪の根源	-0.02	-0.12	0.01	-0.09
3 B 恥ずべきもの	-0.27**	-0.17	0.00	-0.05
4 C 生きる最大の目的	0.11	0.19*	0.11	-0.10
5 C あればあるだけよい	0.02	0.28**	0.09	0.03
6 D 人と呼ぶ	0.20*	0.30***	0.18*	0.07
7 D 人から尊敬される	0.07	0.24**	0.13	0.13
8 E ときは金なり	0.24**	0.21*	0.10	0.13
9 E お金のために働く	-0.01	0.21*	0.02	-0.07
10 F 自立と自由を与えてくれる	0.20*	0.26**	-0.04	-0.09
11 F 権力をあらわす	0.16	0.10	0.07	0.15
12 F お金がものをいう	0.05	0.25**	0.09	0.00
経済取引モラル				
1. ファストパス代	-0.08	-0.05	-0.06	-0.23**
2. 医者への謝礼	-0.05	-0.04	0.02	0.01
3. 成績への報奨金	0.08	-0.09	-0.04	-0.07
4. 落とし物への謝礼	0.17	0.00	0.17*	0.20**

注) MES は、各問に対して「そう思わない」= 1 から「そう思う」= 5 の5段階で測定した変数、経済取引モラルは、各取引について、「良い」= 1, 「悪い」= 0 をとる変数である。*** は 1%水準, ** は 5%水準, * は 10%水準を表す。

歴については、注目すべきは、「3 B. お金は恥ずべきものだ」であり、5%水準で負の相関をもつ。すなわち、父親の学歴が高いほど子どもの禁忌感はやや弱い。その他にも、「6 D. お金は人と呼ぶ」、「8 E. ときは金なり」、「10 F. お金は自立と自由を与えてくれる」と10%水準以下で有意に正であり、父親の学歴が高いほど、尊敬や自尊心、自由・権力といったポジティブなお金への意識をもつことがわかる。

下段の経済取引モラルの4つの設問については、両親の学歴はいずれも有意ではなかった。一方、両親と祖父母の金融知識ともに、「4. 落とし物」と10%水準以下で有意に正の相関を示している。つまり、家族の金融知識が高いと、子(孫)はお金を伴う取引への抵抗感が弱い。逆に、「1. ファストパス代」は、祖父母の金融知識と5%水準で有意に負である。つまり、祖父母の金融知識が高いと、娯楽消費への禁忌感が強まっている。まとめると、経済取引モラルへの家族の影響については、取引のタイ

プによって影響の方向性が異なっている。

表には示していないが、これらの相関関係を踏まえ、両親の学歴(短大卒以上とそれ以外)、両親・祖父母の金融知識の有無で平均値の差の検定を行なった。祖父母の金融知識が高いグループは正答数が平均値で4を超えており圧倒的に高く、両親の学歴についても、親の学歴が高い方が、子のお金に対する禁忌感が弱いことを確認した。母親の学歴の方が父親の学歴より影響力が大きく、学歴が高いほどお金に対して好意的であることが示された。

(b) 養育期のお金の管理による違い

お小遣いのもらい方やお年玉の使い方の相関係数をもとに、MESの平均値の差の検定を行なった結果を表6に示す。お小遣いとお年玉の質問は、複数の選択肢から回答を求めており、2群間以上の平均値の差の検定が必要であるため、Bonferroni法により、調整化された有意水準を求め、各比較ペアの有意検定を行なっ

表6 お金に対する意識とお金の管理：多重比較

お金の管理の違い：お小遣い			
お金の倫理尺度 MES「4 C. 生きる最大の目的」		平均値の差	有意水準
(A) もらい方	(B) もらい方	(A - B)	
定期的	その都度	0.66	*
その都度	定期的 + 必要に応じて追加	-1.04	**
	もらっていない	-1.01	**
お金の倫理尺度 MES「7 D. 人から尊敬される」		平均値の差	有意水準
(A) もらい方	(B) もらい方	(A - B)	
定期的	その都度	0.85	**
お金の管理の違い：お年玉			
お金の倫理尺度 MES「1 A. かけがえのないもの」		平均値の差	
(A) 使い方	(B) 使い方	(A - B)	有意水準
貯金	両親に渡す	0.45	**
お金の倫理尺度 MES「3 B. 恥ずべきもの」		平均値の差	
(A) 使い方	(B) 使い方	(A - B)	有意水準
両親に渡す	自由に使う	0.59	**

注) *** は 1% 水準, ** は 5% 水準, * は 10% 水準を表す。Bonferroni 法を用いた結果を記載している。また、これらの変数は、一元配置分散分析 (one way ANOVA) でも、「すべての平均値が等しいという」帰無仮説は棄却されている。

た¹³⁾。お小遣いのもらい方による有意な違いがある変数は、「4 C. 生きる最大の目的」と「7 D. 人から尊敬される」の2つであった。「お金に対する意識」については全体として、「定期的」の方が「その都度」より平均値が高く、定期的にお小遣いをもらっていた学生の方がよりお金に対して禁忌感が低い。

お年玉の使い方による有意な違いがある変数は、「1 A. かけがえのないもの」と「3 B. 恥ずべきもの」であった。特に、お年玉を両親に渡すグループに特徴がみられる。「1 A. かけがえのないもの」は、「貯金する」よりも「両親に渡す」の平均値が低い。すなわち、「貯金をする」方が「お金はかけがえのないものだ」と強く思っていることがわかる。また、「両親に渡す」は、「自由に使う」より「恥ずべきものだ」と強く思っている。以上より、お小遣いのもらい方やお年玉の使い方の違いによって、すべてではないにしても、お金に対する意識に差異が生じることが示された。

また、表には記載していないが、お小遣いのもらい方のうち「定期的かつ必要に応じてお小遣いをもらう」と金融リテラシーには、5%水準で有意に負の相関がみられた。お年玉につい

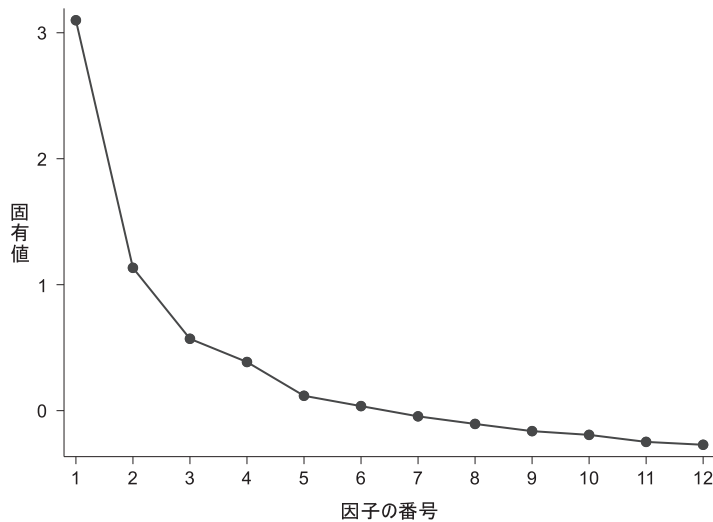
ては、使い方の違いによって金融リテラシーに与える影響が異なる可能性を確認した。

以上、本稿では、家族の属性と金銭的生活習慣の角度から家庭環境を捉え、金融リテラシーに与える影響を考察し、生まれ育った家庭環境と金融リテラシーに一定の相関があることを示した。これは、金融広報中央委員会が実施している大規模な「金融リテラシー調査」〔2016, 2019〕で示された家庭内での金融教育と金融リテラシーとの関係と整合的な結果である¹⁴⁾。一方で、島〔2017, 2018〕、北野ほか〔2015〕では、家庭内での金融教育が必ずしも金融リテラシーに結びつくとは限らないことを示している。ただし、「家庭環境」をどのように捉えるかによって、結果が異なる点に注意が必要である。とくに本稿では、これら先行研究とは異なり、直接的な金融教育というよりも、お金の禁忌感にも影響を与えるような生活に密着した家庭環境の効果を検証している。

(4) MES の因子分析

最後に、多くの先行研究と同様、本稿でも因子分析（主因子法、プロマックス回転）を用いて、大学生の「お金に対する意識」に潜在的に

図1 スクリーンプロット



注) 主因子法による。相関行列の固有値を固有値順位にプロットしている。

存在する概念（潜在変数）の推定を試みる。はじめに、お金の倫理尺度 MES に関する12の項目すべてを用いて因子分析を行なったところ、共通因子として6つの因子（クロンバック信頼係数（以下 α 係数）は、0.76）が抽出されたが、因子のスクリープロット（図1）を見てのとおり、第1因子の負荷が大きく、複数の因子は固有値が0に近い。しかしながら、第3因子と第4因子のあいだの傾きより、第4因子と第5因子のあいだの傾きの方が大きい。これらの点を考慮し、4因子構造と仮定するとともに、Kaiser の正規化をとまうプロマックス法を用いて推定した結果を表7に示している¹⁵⁾。表には記載していないが、各因子の α 係数は、第1因子が0.71、第2因子が0.61、第3因子が0.61、第4因子が0.63であり、内的整合性は中程度であった。4因子間の相関係数は表7の下段に記している。第1因子は、「尊敬」と「自由と権力」の項目が高い負荷量を示しており、第2因子は、「善」、「達成」、「自由と権力」の3つの項目が高い負荷量を示している。第3因子は、「節約」、「自由と権力」、「達成」、第4因子は、「悪」の2つの項目を示している。すなわち、先行研究と同様に項目がまとまった因子

もあれば予想外のまとまり方をした因子もある。

まず、先行研究である Tang [1995] と本稿の結果を比較すると、抽出された因子の数が異なる。Tang [1995] は、740人の被験者をもとに12の質問項目より3つの因子（成功、節約、悪）を特定している。単純に比較することはできないが、本稿では4つの因子を抽出している。Tang の結果から予想される因子構造は、4番目の因子である F4 のみであり、それは「悪」（2B, 3B）の因子負荷量が60%を超える大きな水準である。その他3つの因子（F1, F2, F3）では、認知的側面（達成、尊敬、自由と権力）と行動的側面（節約）が入り混じった結果であり、Tang とは異なっている。

実際、Tang 自身も、台湾、アメリカ、イギリスの3ヵ国を対象に MES を実施し、想定した因子構造が得られたのはアメリカのみであり、台湾とイギリス、さらに3ヵ国をあわせた全サンプルでは、適合性が悪いことを示している（Tang et al. [2002]）。すなわち、本稿が得た4つの因子は、一部に先行研究と一致する一方で、日本独自の傾向も示している。因子の性格を解釈すると、第1因子はどちらかという

表7 「お金に対する意識」の因子分析結果：回転後

お金の倫理尺度 MES		F 1	F 2	F 3	F 4
6 D	人と呼ぶ	0.72	0.23	-0.09	0.03
11 F	権力をあらわす	0.63	0.05	0.03	0.04
8 E	ときは金なり	0.51	-0.05	0.06	-0.22
7 D	人から尊敬される	0.44	-0.15	0.35	0.18
1 A	かけがえのないもの	0.09	0.59	0.02	-0.11
10 F	自立と自由を与えてくれる	0.34	0.47	0.04	0.00
4 C	生きる最大の目的	-0.11	0.44	0.23	0.38
9 E	お金のために働く	-0.06	0.03	0.63	-0.09
12 F	お金がものをいう	0.22	0.01	0.51	0.03
5 C	お金があればあるだけよい	0.00	0.18	0.43	-0.17
2 B	すべての悪の根源	0.10	0.04	-0.15	0.66
3 B	恥ずべきもの	-0.16	-0.15	0.04	0.61
因子間相関		F 2	0.54		
		F 3	0.41	0.39	
		F 4	-0.02	-0.04	0.21
					1.00

注) 因子数を4とし、Kaiserの正規化をとまう斜交回転（プロマックス）法による結果を示している。

「権力と地位」、第2因子は「重要性」、第3因子は「保有」、第4因子は「悪」を表わしていると考えられる。この分析結果から、今後の研究において、MESを日本で適用する場合には、変数の解釈に一層の注意が必要であろう。

- 13) 多重比較には Tukey-Kramer 法, Bonferroni 法, Scheffe 法などいくつかの方法があり、有意な差を検出する程度や適用できるデータの種類が異なっている。本稿では、比較群が多くないため、一般的な Bonferroni 法を採用し、お小遣いは4群（定期的、その都度、定期的かつ必要に応じて、もらっていない）、お年玉は3群（貯金、両親に渡す、自由に使う）による平均値の差の検定を行った。
- 14) 金融リテラシー調査〔2016, 2019〕(shiruporuto.jp)を参照。
- 15) 因子間に相関があることを仮定する斜交回転（プロマックス回転）を行ない、すべてではないが一部の因子間に相関があることが示されたためプロマックス回転を採用した。バリマックス回転でも推定し、ほぼ同様の結果が得られることを確認した。また、Kaiserの正規化なし推定も行なったがほぼ同じ結果が得られた。

4. おわりに

本稿は、大学生のお金に対する意識（お金の倫理観と経済取引モラル）を定量化し、それらの特徴を明らかにするとともに、家庭環境・金融リテラシーとの関係を検証した。その結果、

（1）お金に対する禁忌感が高い人は金融リテラシーが低い、（2）両親の学歴が高いほどお金に対する禁忌感が弱い、（3）祖父母の金融知識や投資経験は孫の金融リテラシーを高める、（4）幼少期のお金の管理法もお金に対する意識に影響を及ぼすことを確認した。第1の結果は、お金や経済取引への抵抗感という心理的態度も、金融リテラシーの決定要因の一つである可能性を示唆している。第2、第3の結果は、家族間での金融知識と禁忌感の影響の伝播を示している。第4の結果は、家庭での金銭教育（お小遣いのあげ方など）が、お金に対する禁忌感に影響する効果をもつことを示唆している。最後に、これらの結果を踏まえ、既存の尺度をもとに因子分析を行ない、「お金に対する意識」に4つの共通因子を抽出した。海外先行研究での MES 尺度の特徴と整合的な部分だけでなく、一致しない部分、すなわち日本独自の特徴を確認した。

今後の課題として、①金融教育への示唆、②アンケート調査の拡大、③日本独自の尺度の作成、④個人の家計行動、さらには幸福度等へ与える影響の検証などがあげられる。特に①は重要なテーマであり、本稿が得た結果と照らし合わせると、お金に対する禁忌感が強い学生に対

して、一律的に金融教育を試みたとしても効果が限定される可能性がある。すなわち、川西・橋長〔2016〕が示しているように、マインドセット（金融に対する印象や考え方）の重要性に着目し、個別の金融教育を構築することでより一層の効果が期待できる。さらに、家庭での金融教育についても議論が必要である。お金の禁忌感に影響を与えるような生活に密着した家庭環境の効果、すなわち、養育期の習い事、家庭内行事、お小遣いなどの金銭的生活習慣の角度から家庭環境を捉える研究も興味深い。

本稿が得た結果から具体的な教育的インプリケーションを見出すため、アンケート調査対象（他学部生、社会人）を拡大するとともに、原岡〔1990〕や渡辺〔2014〕が取り組んでいるように、心理学研究の伝統的な枠組みを超え日本独自の尺度を作成し、金融教育へと議論を発展させることは、興味深い将来の課題である。さらに、分析対象を大学生から社会人へと拡大することにより、学校教育にとどまらず、ライフスタイルの多様化に対応した社会人向けの金融教育を提言し、より健全な投資行動の促進へと議論を深めることはさらなる今後の課題とした。

<参考文献>

- 小山内幸治、西尾圭一郎、北野友士〔2016〕、「大学生を対象とした金融リテラシー調査票の作成と調査結果について」『経済教育』第35号、136-148頁。
- 川西諭、橋長真紀子〔2016〕、「行動経済学の金融経済教育への応用－行動バイアスからマインドセット・バイアスへ－」『金融庁金融研究センターディスカッションペーパー』、DP2015、3。
- 北野友士、小山内幸治、西尾圭一郎〔2015〕、「金融教育現場での実地調査に基づく金融リテラシーの実態把握」『金沢星稜大学総合研究年報』第35巻、1-6頁。
- 北野友士、小山内幸治、西尾圭一郎、松浦義昭、氏兼惟和〔2016〕、「金融リテラシーに対する影響要因の検証と金融教育への示唆－大学生へのアンケート調査を基に－」『ファイナンシャル・プランニング研究』第16号、46-57頁。
- 島義夫〔2017〕、「大学生の金融リテラシー改善と金融への関わり動機」『証券経済学会年報』第52号、27-38頁。
- 島義夫〔2018〕、「大学生の金融に関わる心理的動機と金融リテラシーの関係－効果的な金融教育へのヒントを探る－」『玉川大学経営学部紀要』第30号、17-33頁。
- 原岡一馬〔1990〕、「お金に対する態度と価値志向Ⅰ－態度の構造と態度尺度の構造－」『名古屋大学教育學部紀要教育心理学科』第37号、199-216頁。
- 家森信善・上山仁恵・柳原光芳〔2020〕、「高齢者の望ましい金融行動と関連の深い金融リテラシーは何か？－Lusardi and Mitchellの3大質問の有効性の検討－」『生活経済学研究』第51号、1-18頁。
- 渡辺伸子〔2014〕、「大学生用お金に対する信念尺度の作成」『応用心理学研究』第40巻第1号、11-22頁。
- 渡辺伸子・佐藤有耕〔2010〕、「お金に対する態度に関する心理学的研究の動向」『筑波大学心理学研究』第40号、61-71頁。
- Bianchi, M.〔2018〕, "Financial literacy and portfolio dynamics," *The Journal of Finance*, 73 (2), pp.831-859.
- Campbell, J. Y.〔2016〕, "Restoring Rational Choice: The Challenge of Consumer Financial Regulation," *American Economic Review*, 106 (5), pp.1-30.
- Cunha, F. and J. Heckman〔2007〕, "The Technology of Skill Formation," *American Economic Review*, 97 (2), pp.31-47.
- Frey, B.S., and R. Jegen〔2001〕, "Motivation Crowding Theory," *Journal of Economic Surveys*, 15, pp.589-611.
- Furnham, A.〔1984〕, "Many Sides of the Coin: The Psychology of Money Usage," *Personality and Individual Differences*, 5, pp.501-509.
- Furnham, A.〔2014〕, *The New Psychology of Money*, London, UK: Routledge.
- Furnham, A., E. Wilson, and K. Telford〔2012〕, "The Meaning of Money: The Validation of a Short Money-types Measure," *Personality and Individual difference*, 52, pp.707-711.
- Gresham, A., and G. Fontenot〔1989〕, "The Differing Attitudes of the Sexes toward Money: An Application of the Money Attitude Scale," *Advances in Marketing*, 8, pp.380-384.

- Guiso, L., P. Sapienza, L. Zingales [2008], "Trusting the Stock Market," *The Journal of Finance*, 63, pp.2557-2600.
- Jappelli, T. and M. Padula [2013], "Investment in financial literacy and saving decision," *Journal of Banking and Finance*, 37, pp.2779-2792.
- Kawamura, T., T. Mori, T. Motonishi, and K. Ogawa [2021], "Is Financial Literacy Dangerous? Financial Literacy, Behavioral Factors, and Financial Choices of Households," *Journal of the Japanese and International Economies*, 60, 101131.
- Keller, C., and M. Siegrist [2006], "Investing in Stocks: The Influence of Financial Risk Attitude and Values-Related Money and Stock Market Attitudes," *Journal of Economic Psychology*, 27, pp.285-303.
- Lay, A., and A. Furnham [2018], "A New Money Attitudes Questionnaire," *European Journal of Psychological Assessment*, 35 (6), pp.813-822.
- Lim, V.K., and T.S.H. Teo [1997], "Sex, Money and Financial Hardship: An Empirical Study of Attitudes towards Money among Undergraduates in Singapore," *Journal of Economic Psychology*, 18, pp.369-386.
- Lusardi, A. and O.S. Mitchell [2008], "Planning and Financial Literacy: How do women fare?" *American Economic Review*, 98 (2), pp.413-417.
- Lusardi, A. and O.S. Mitchell [2014], "The Economic Importance of Financial Literacy: Theory and Evidence," *Journal of Economic Literature*, 52, pp.5-44.
- Lusardi A., P-C Michaud and O.S. Mitchell (2017), "Optimal financial knowledge and wealth inequality," *Journal of Political Economy*, 125, pp.431-477.
- Sabri, M.F., M. Macdonald, T.K. Hira, and J. Masud [2010], "Childhood Consumer Experience and the Financial Literacy of College Students in Malaysia," *Journal of Family and Consumer Sciences*, 38 (4), pp.455-467.
- Sandel, M. J. [2012], *What Money Can't Buy - The Moral Limits of Markets*, Penguin Books. (邦訳 マイケル・サンデル, 鬼澤忍訳 [2014], 『それをお金で買いますかー市場主義の限界ー』, 早川書房)
- Shim, S., B. Barber, N. Card, J. Xiao, and J. Serio [2010], "Financial Socialization of First-Year College Students: The Roles of Parents, Work, and Education," *Journal of Youth and Adolescence*, 39, pp.1457-1470.
- Solon, G. [1992], "Intergenerational Income Mobility in the United States," *American Economic Review*, 82, pp.393-408.
- Tang, T.L.P. [1992], "The meaning of Money Revisited," *Journal of Organizational Behavior*, 13, pp.197-202.
- Tang, T.L.P. [1993], "The meaning of Money: Extension and Exploration of the Money Ethic Scale in a Sample of University Students in Taiwan," *Journal of Organizational Behavior*, 14, pp.93-99.
- Tang, T.L.P. [1995], "The Development of a Short Money Ethic Scale: Attitudes toward Money and Pay Satisfaction Revisited," *Personality and Individual difference*, 19, pp.809-816.
- Tang, T.L.P., A. Furnham, and G.M.W. Davis [2002], "The Meaning of Money: The Money Ethic Endorsement and Work-related Attitudes in Taiwan, the USA and the UK," *Journal of Managerial Psychology*, 17, pp.542-563.
- Van Rooij, M., A. Lusardi, R. Alessie [2011], "Financial Literacy and Stock Market Participation," *Journal of Financial Economics*, 101, pp.449-472.
- Yamauchi, K. T., and D.J. Templer [1982], "The Development of a Money Attitude Scale," *Journal of Personality Assessment*, 46, pp.522-528.
- Zimmerman, D. [1992], "Regression toward Mediocrity in Economic Stature," *American Economic Review*, 82, pp.409-429.

(投稿受付2021年1月17日,)
(最終受理日2021年7月9日)

A Survey of University Student's Attitudes toward Money: The Relationship between Money, Financial Literacy, and Family Environment

Chisako Yamane

Faculty of Economics, Hiroshima University of Economics

Hiroyuki Aman

School of Business Administration, Kwansei Gakuin University

Taizo Motonishi

Faculty of Economics, Kansai University

Abstract:

In this study, we conducted a questionnaire survey of university students to quantify their attitudes toward money, and empirically clarified the characteristics of these attitudes and their effects on financial literacy. We discovered that students with a strong sense of abstinence toward money tend to have relatively low financial literacy. We also found that the psychological aversion of students to money was weaker when their parents were highly educated and that students had higher financial literacy when their grandparents had strong financial knowledge. Another factor that made a difference in some students' attitudes toward money was the way they managed their money in childhood. Finally, we conducted a factor analysis and extracted four common factors related to the awareness of money. As a result, we found that there is a unique tendency for Japan that is different from that described in previous studies.

Keywords:

psychological aversion, Money Ethic Scale (MES), financial literacy, family environment